

村田正志著作集

第一卷『^増南北朝史論』

第二卷『統南北朝史論』

米原正義

一 著作集の刊行

村田博士の古稀を記念して、「村田正志著作集」を刊行しようとの動きは、数年前から企画されていたが、ようやく軌道に乗り、全七巻のうち、第一巻『^増南北朝史論』(A5版、本文四二五頁、九〇〇〇円)が今年(昭和五十八年)三月、第二巻『統南北朝史論』(本文四四八頁)が八月に、思文閣出版より発行された。

『^増南北朝史論』は、著者心血の『南北朝史論』に、六篇の論説を増補したものである。『南北朝史論』は、戦前、戦中しきりに取沙汰され、あまりにも感傷に走り過ぎた南北朝史研究を、著者の透徹した史眼により、厳密な実証史学の方法をもって論証、あるいは旧説を正し、あるいは補正して明快であり、昭和二十四年中央公論社より刊行以来、学界の評価は高く、重版もされ、著者をして南北朝史研究家の第一人者の地位を不動にせしめた記念すべき高著であった。いまそれに増補して世に送り出されたが、本著作集の巻頭を飾るにふさわしいものといえよう。

『統南北朝史論』は、『南北朝史論』の統篇と称すべきもので、南北朝に関する諸論三十四篇を、全五章に分けて収録されている。第一巻、第二巻については、のちにやや詳しくふれるので、第三巻から最終第七巻までの内容・特徴を簡単に紹介しよう。

二 著作集の概観

第三巻『続々南北朝史論』は、『南北朝論』『南北朝と室町』『吉田定房事蹟』の三著作を収める。『南北朝論』は、至文堂の「日本歴史新書」のうちの一冊で、昭和三十四年刊。南北朝史の概略と、その思想の要が体系的にたどられ、昭和の現代にまでおよんでいる。『南北朝と室町』は、講談社の「日本歴史全集」全十七巻のうちの第八巻で、昭和四十四年刊。鎌倉幕府執権北条氏の滅亡から建武中興、南北朝の動乱、室町足利政権の確立を経て、嘉吉の乱に至る主として政治の推移を、一般向きにわかりやすく書かれたものであるが、随所に創見が見られ、著者ならではの感が深い。

『吉田定房事蹟』は、故松本周二氏との共同執筆ではあるが、下書はほとんど村田博士の手に成る。吉田定房事蹟顕彰会より昭和十五年刊。万里小路宣房・北畠親房とともに後三房といわれた定房。後醍醐天皇の乳父として、幼児より傳育し、即位されてからは側近として活躍した定房。その定房は、元弘の乱に際し、後醍醐天皇の鎌倉幕府討滅の計画を密告したとされ、史上疑問の人物に数えられていた。こうした吉田定房六十五年の生涯を、数少ない日記・古文書など、いわゆる根本史料を駆使して、厳正公平に批判を下した評伝である。この書は出版当時、関係の人々に贈呈されただけで、時局の急転により、防空壕に蒸れ、ほとんど用をなさない状態になってしまった。いうならば悲運の書であり、埋もれた一書であった。私はいまこの初校本により、周防山口を根拠とした四州の守護大内政弘が、文明七年十月在京中、吉田定房所持本系統の「新撰姓氏録」を筆写し、その来歴を小槻晴富に奥書させたことを知った。この事實は、大内文化を考究上、いろいろ意味で重要であり、もっと早く、この書を披見していたらと、戦国武士の文化を追求している私として、悔まれてならない。この幻の書が日の目を見るのも近い。嬉しい限りである。

第四卷『^註椿葉記』は、宝文館より昭和二十九年刊。伏見宮貞成親王が御子後花園天皇に進上された「椿葉記」は、南北朝終末後の貴重な史料である。本巻はその「椿葉記」の清書本系統の一古写本（著者蔵）を底本に、諸本を対校し、また同親王自筆草稿三種を掲げ、清書本の成立過程がうかがわれるようになっている。註解は「椿葉記」中の語句はいうまでもなく、根本史料によって厳密かつ詳細に史実の証明がされていて、まさしく歴史的註解といえる。さらに前半に右の底本が影印で掲載され、一特徴となっている。なお、はじめに五十二頁にわたる解題があり、巻末に付録として、「皇室并諸家系図」「管絃諸道相承系図」「御領文書并御領目録」などが収められていて、まことに有益である。

第五卷『国史学論究』は、第一章 神祇と神社、第二章 学僧と寺院、第三章 国衙領論究、第四章 古書及び古記の研究の四章より成り、大小三十数篇を収める。第一章「渡唐天神思想の源流」は、著者自負の一篇。第二章は、青蓮院と慈円関係、称名寺劔阿、中世の塔頭などの論考を収録。第三章は、著者の研究目標の一つ中世国衙領研究の結晶。第四章は、「蒙古襲来絵詞の再検討」その他、ともに古書・古記に属するが、とりわけ「京極為兼と玉葉和歌集の成立」は、中世国文学者に多大の影響を与えた名篇で、著者の本領の一つに数えられる。

第六卷『古文書研究』は、第一章 古文書概説、第二章 古文書の伝来と研究、第三章 出雲に於ける古文書、第四章 古文書研究調査余録の四章より成り、大小約三十篇を収める。第一章は、中世文書の概説と神社関係古文書の論究。第二章は、わけても「相楽家蔵結城文書の概要及び解説」が光る。第三章は、鳥根県文化財保護委員でもあった著者が、出雲に限りない愛着をもつのは当然で、出雲の古文書研究の出発点ともなる論を収録。ともかくこの巻は、現に文化財保護審議会の古文書部会長の重責を担われている著者の、長年にわ

たる著実で正確な古文書調査・研究、そして刊行の足跡を遺憾なく発揮したもので、まさに独壇場といつてよい。

最終の第七巻『風塵録』は、著者が三十年代東大史料編纂所にあつて、第六編（南北朝）編纂のかたわら、南北朝史研究のために蒐集筆写された古文書・古記録から、特に重要と認められた史料を選んで収録されたもので、著者の面目躍如たるものがある。この中には今日容易に見難いもの、社会制約上から公表できなかったものも含まれ、南北朝史研究者にとって、垂涎的となるであらう。

三 『^増南北朝史論』

次に保留しておいた第一巻、第二巻に言及しよう。まず順序として第一巻『^増南北朝史論』から見よう。第一章 皇統史上の南朝は、皇統史から南朝を見たもので、持明院・大覚寺兩統の迭立と、南北朝正潤論に視点がおかれている。第一節で兩統分立の由来、第二節でその分裂と統一に及ぼした北条以下諸氏の行動、第三節で当時より現代に至る南朝正統論の歴史、第四節でその批判、第五節で南朝衰滅の原因を各方面の社会情勢から論ずるが、第四節は、本章中もつとも熱がこもっている。

第二章 建武の新政は、神社制度・国衙領制度の二節から究明したものであるが、とりわけ国衙領の研究は、著者の研究領域の一つであつて傾聴に値する。第三章 南朝の歴代天皇は、後醍醐・後村上・長慶・後亀山四天皇の事蹟を解明したもので、著者の本領を発揮した力作である。第二節「後村上天皇と三光国師」では、出雲雲樹寺蔵「伝後醍醐天皇宸翰」四通一巻文書を、一通は光厳天皇宸翰、三通は後村上天皇宸翰と考定した過程が述べられている。昭和十四年の旧稿に属するが、著者は「私は図らずもこの解決を得て、南朝史上の重要問題が、この一大燈火によって俄かに明らかになり行く如き心地がして、歎

喜と研究欲の止め難き躍動を覚えたのである。」といわれていて、古文書鑑定に至難さを語って余りあるものがある。この章の庄巻は第三節「長慶天皇と慶寿院」で、孤峯覚明が創建し、これに住して生涯を終えた泉州大雄寺の一塔頭長慶院こそ、長慶天皇晩年の在所と推定された。その経過は、史学研究的常道を行き、その手法は魅力的で説得力がある。しかもこの論は、長慶天皇の御陵決定（嵯峨東陵）と時期を同じくし、著者は一大決意のもとに執筆した、と往時を回顧されていて、緊迫感を覚える。

第四章 後村上天皇宸翰調査は、増補の部で、第一節「村手重雄氏蔵後村上天皇宸翰の考証」、第二節「新発見の後村上天皇宸翰」、第三節「後村上天皇宸翰採訪余談」の三篇より成るが、これは第三章第二節「後村上天皇と三光国師」と関連する。著者は本巻の「あとがき」で、村手氏蔵文書十三枚一卷すべて後村上天皇宸翰と断定したことについて、「新史料、新史実を解明した際の際のよろこびは、実に何物にも換えられぬものである」と、感慨にふけていられる。とまれ後村上天皇宸翰は、著者によって、しだいに明らかとなった。こうした事実から、昭和四十三年四月、同天皇事蹟を今上陛下の御前で進講（第二卷第二章第三節収録）されたのであった。

第五章 遺物と史蹟は、第一節「花山院長親と衣奈八幡宮縁起絵巻」、第二節「伝後醍醐天皇御木像をめぐる史実」、第三節「大雄寺の懷古」、第四節「大河原の遺蹟」の四篇より成る。前二篇は、埋もれた文化財の発掘。第三節は、大雄寺開山孤峯覚明追慕の論。

第六章 後南朝の悲劇は、増補の部。第一節「小倉宮の史実と伝説」は、南北朝合体、南朝の廃絶後の、いわゆる後南朝の歴史、わけても後亀山天皇の皇子小倉宮（恒敦宮）一流の事蹟を、史実と伝説の両方面より克明に追った雄篇で、秘められた後南朝の史実と伝説の関係を示唆する。第二節「忠義王の文書を訪ねて」は、長禄元年十二月二日凶刃に斃られたと考えられる忠義王の文書

三通を、なお十分に検討の要もあろう、としながらも、一応享徳四年の文書と認め、その七、八月の頃、忠義王が大河内（三重県牟婁郡紀和町）の行宮に挙兵されようとしていたことをほめかしていられる。その大河内に「後南朝史蹟大河内行宮址」の碑が建てられ（裏面「大河内行宮址建碑由来」は村田博士執筆）、昭和五十六年十二月二日除幕式典後における著者の記念講演を収録したものが、第三節「後南朝と熊野」である。

第七章 史料研究は、第一節「登山紹瑾の仏慈禪師号問題」、第二節「前田家本嘉喜門院御集の価値」、第三節「帝系図と本朝皇胤紹運録」、第四節「研究余録」、第五節「史料文献解説」から成る。とりわけ第一節は、曹洞宗総持寺の開山登山紹瑾は南朝と関係なし、と断じ、旧説を一蹴した注目すべきものであり、あくまで事実の究明を史学研究の第一義とする著者の決意がにじみ出ている。第五節は、主に南朝の動静をうかがう指針ともなる基礎的文獻の解題である。なお本巻には、「後村上天皇宸筆御書状」以下六葉の口絵、「海門承朝自筆御書状」以下九葉の写真が挿入され、理解に便宜を与えている。

四 『統南北朝史論』

次は第二卷『統南北朝史論』である。第一章 南北朝史上の諸問題は、第一節「南北朝問題の研究と展望」、第二節「南北朝動乱に関する学説」、第三節「皇統に関する熊沢一派の俗論を筆誅する」、第四節「統史愚抄の南北朝観」、第五節「中村博士の南北朝研究における代表的著書」、第六節「南北朝の神器」、第七節「建武中興に於ける信濃の国司と守護」、第八節「建武中興と飛騨国司・飛騨守護の成立」の八篇より成る。

第一章の中心は第三節で、副題に「渡辺世祐博士・吉田長蔵氏論争の批判」とある。戦後熊沢寛道なる人物が現われ、南朝皇胤の正統な子孫なりと称し、南朝正統論を悪用し皇室を誹謗して憚らず、それを支持する著名なる学者もあ

った。そこで渡辺世祐博士が「系図の偽作に就いて―熊沢・酒本天皇両系譜の駁撃―」と題する論文を発表された。これに対し『熊沢天皇の真相』という書物を刊行し熊沢天皇説を流布させた吉田長蔵氏が、「熊沢天皇『系譜』に対する渡辺世祐博士の言評妄断を駁す」と題する抗議文を発表した。そこで村田博士は、豊富なる知識と深い学的経験を自在に駆使して、「熊沢系譜」の全く信用できないことなどを論証し、吉田氏の抗議文を「全篇ほとんど全く信すべからざる妄語」ときめつけた。筆誅はさらに『熊沢天皇の真相』にもおよび、まことに辛辣である。昭和二十六年十二月この義憤の論文が発表されてから、熊沢一派の動きに終止符が打たれたのであった。

第二章 動乱の世の人々の事蹟は、第一節「後醍醐天皇」、第二節「後醍醐天皇―親政の実相―」、第三節「後村上天皇御事蹟草案」(前述)、第四節「後村上天皇の琵琶秘曲相伝の史実」、第五節「長慶天皇研究に於ける武田博士の功績」、第六節「後小松天皇の御遺詔」、第七節「伏見宮崇仁親王の二皇子に関する史実」、第八節「楠公論対話」、第九節「足利氏の興起」、第十節「佐野字氏の尊氏論」、第十一節「兼好法師」の十一篇から成る。主節の第六はあとで述べるので、他の幾分について紹介する。第四節は、河内金剛寺摩尼院の行宮にあった後村上天皇が、正平十年四月および同十三年四月に、法印良空から琵琶の秘説を伝受された史実の論証で、さらに同天皇が正平十六、七年頃、二条教基に楽道説書の精進をすすめ、琵琶楽曲の最秘「万秋楽」を下賜されたのであろう、との推定におよび、かくれたる名篇といえる。第七節は、副題に「山川智応博士に答へて」とあるごとく、伏見宮崇仁親王の御子を、著者が兄治仁王、弟貞成親王としたのに対し、山川氏がその逆を主張されたので、これに對して反論し、自説の正しさを論証したものである。第十一節は、「徒然草」の作者吉田兼好の出家の動機を、後宇多天皇の崩御にもとづく忠節ではなく、失恋の苦悩をのがれるためであって、やがて漂泊の旅に出て、木曾の山中に心の

痛手をいやした、とされていて、小篇ながら興味をそそる。

第三章 史籍論究は、第一節「神皇正統記」、第二節「神皇正統記における正統の意義」、第三節「嘉喜門院集解説」、第四節「太平記について」、第五節「太平記の史実」の五篇より成る。第二節では、北畠親房の説く皇統の正統を論じ、それは「神皇正統記」に見える世代併記の天皇、また親房著「元々集」神皇紹運篇に見える特定天皇の一流を意味する、とされていて、注目すべき発言である。第三節は、後村上天皇の中宮嘉喜門院の私家集の解説で、第一巻第七章第二節「前田家本嘉喜門院御集の価値」の改訂であるが、相俟って、南朝末期、特に長慶天皇御代の史実および門院が和歌に秀いでいられたことが知られ、史学・文学史上貴重な私家集として注意すべきである、という。

第四章 古文書研究は、第一節「北朝天皇宸翰概要」、第二節「南朝五家文書の研究」、第三節「出雲における南朝史料」、第四節「南北朝に生きた人々の筆の跡」、第五節「楠文書の研究」の五篇より成る。第一節は、昭和十五年刊の『宸翰英華』に、北朝の光厳・光明・崇光・後光厳・後円融五天皇の宸翰が、当時の社会事情のために収録されなかったことを遺憾として、「遠い将来或はわが微意(北朝天皇宸翰の出版)をうけつぎ、大成してくれる者もあらうかと思ひ、その人々の基礎作業の一端にもなれば」と念じて執筆し、目録を添えたもので、著者の根本史料に対する態度を表明した労作である。第二節は、福岡県八女郡大淵村五条頼次氏蔵の家伝文書で、著者と黒川高明氏との校訂「五家文書」(史料纂集)の詳細な解題としての意味をもつ。第三節は、第六卷第三章 出雲に於ける古文書 と相互補完的役割を果す。第五節は、楠木正成の後裔と自称し、信長や秀吉の右筆に成り上がった楠正虎(長諱)関係の文書解説である。

第五章 史蹟及び遺蹟は、第一節「吉野概説」、第二節「吉野」、第三節「石津の合戦」、第四節「大雄寺遺蹟の廃滅」、第五節「観心寺中院調査報告書草案」

(故松本周二氏と共同執筆)の五篇より成る。第二節は、五十五頁におよぶ長篇。南北朝を中心とした吉野の手引的論であるが、中には江戸時代・元禄十五年吉野郡内石高村数など注意すべき史料が載る。第四節は、第一巻第五章第三節「大雄寺の懷古」の続篇で、大雄寺遺蹟の廃絶を惜しんでいられる。なお本巻には「後醍醐天皇宸筆御願文」以下八葉の口絵、「嘉喜門院集袖書」以下十二葉の挿入写真が収められている。

五 「後小松天皇の御遺詔」

さて残しておいた第二章第六節「後小松天皇の御遺詔」について所感を述べる段階になった。この論文は、昭和十九年二月『国史学』第四十七、四十八合併号に掲載されたが、『国史学』はこの号をもって中止(現在復活一二一号刊)の通告を受け、おそらくこれが最後になるであろうとの思いで執筆されたものである。それほど戦局は悪化していたのである。いまこの論文を再読して、著者の本領中の主流は、やはり鎌倉・建武新政・南北朝・南北朝終末後の皇統史で、一貫して皇統史上の重要問題に取組んでこられたように思われる。

たしかに著者の眼は朝廷を中心とする南北朝史およびその前後の研究と、古文書・古記録の研究との二大分野に向けられてはいるが、後者の古文書・古記録の研究は、南北朝史を中心とした皇統史、広く公家貴族の究明のための史料研究が基礎になっており、その土台の上に古文書・古記録の研究領域が拡大されていったものと考えられる。著者の学問をこのように見ると、南北朝中心の皇統史に還らざるを得ない。「後小松天皇の御遺詔」は、それを端的に表明した、それこそ心血をそそがれた雄篇と思うのである。

北朝持明院統は、光厳天皇ののち、長嫡の崇光院流と、その弟後光厳院流に分かれることになる。後光厳院流は後光厳・後円融・後小松・称光と父子四代の間、他流を交えず一流でもって皇位を継承された。ところが称光天皇が父上

皇に先立って崩御され、皇子なく、称光天皇の弟小川宮もまた父上皇に先立たれ、御子なし。かくて後小松院が崩御になれば、後光厳院流は断絶することになる。そこで後小松院は、称光天皇の崩御に際し、崇光院流の伏見宮貞成親王(後崇光院)第一の御子彦仁王を、「(後小松)院御所生の如く、御父子の儀を契約せられ」皇位を継承せしめられた。これが後花園天皇である。すなわち後小松院は、あくまで後光厳院流の皇統が断絶しないように企図されたのであった。その執念深さは三ヶ条の遺詔となり、その第一条は、実に後光厳院流の断絶せざる様取計らうべき事、ということであった。

著者はこの間の推移を、客観的に見事に解明され、しかもその文には迫力がある。私はこの迫力は、論文を執筆されたときの情勢の厳しさに起因するものと考えていた。もとよりそれもあろうけれども、むしろ後小松院の後光厳院流を断絶させまいとする強烈な意志が、著者の胸を打ったからではあるまいか。私は大覚寺統後醍醐天皇の気魄と、南朝歴代天皇の皇統に対する執念の峻烈さに驚嘆していたが、ここに至って、持明院統後小松天皇のそれは、大覚寺統の諸天皇に勝るとも劣らないことを知った。

だが後小松院の素意はどうあろうと、皇統は血統上、持明院統嫡流の崇光天皇一流に復帰したことは事実である。このことについて後花園天皇の実父貞成親王は、「神慮」とされているが、親王の気魄が後小松院のそれを上まわったと解せられないことはない。

かくて「後小松天皇の御遺詔」の一篇は、著者の南北朝中心皇統史の総決算といっても過言ではあるまい。それだけに、後小松院の遺詔三ヶ条のうち、あとの二ヶ条の、さらなる追究がなされていないのは、惜しみても余りあるものがある。

(国学院大学教授)

学 事 彙 報

○国史学専攻学生の修学旅行

史学地理学科国史学専攻第四年生の昭和五十八年度修学旅行は、連休明けの五月第二週の十日から十三日まで三泊四日で、山口、北陸、東北の三班に分れて実施した。幸い天気に恵まれ、またそれぞれの地で御協力をいただいた方々のお蔭で、各班とも下記のように予定の日程に従って実地見学を進め、少なからぬ成果を収めて無事終了することが出来た。

山口班 この班は佐藤教授と佐々講師の両名が担当した。(多賀教授も加わる予定であったが、直前に多少体調を害したので不参加)。学生は男子十五名女子八名の計二十三名である。

五月十日午前十時半、予定通り全員山陽線下関駅に集合。下関市内の見学には前下関女子短大生吉村宮男氏が案内に当たって下さることになった。まず駅近くにある長州藩勤王派のパトロンの豪商白石正一郎旧宅跡を吉村氏に教えられたのち、予約してあった大隅バスに搭乗し、赤間神宮に赴く。神官水野氏はわざわざ同社の古文書を準備して待って居られ、戦災で一部損傷した国宝長門本平家物語の原本も見せていただいた。ついで隣接する下関記念館(旧春帆楼)を訪ね、日清戦争講和会議の行なわれた部屋が当時の備品配置そのままの有様で保存されているのを見学した。それより国立公園火の山に登り、頂上から関門海峡を俯瞰しながら吉村氏の説明に壇浦源平合戦の往時を偲んだ。ついで功山寺、長府博物館、忌宮神社を見学、乃木神社では正式参拝ののち神官の

方から詳しい説明を受け、さらに住吉神社に赴いたのち吉村氏とお別れし、高杉晋作の遺品を集めた東行記念館に赴く。すでに五時の閉館時刻を過ぎていたが、係りの方の御好意によって内部をゆっくり見学することが出来た。それよりバスの中で学生の研究発表を行ないながら長門市内に入り、湯本温泉の山村別館に投宿。

十一日、八時半に宿舎を出発、まず大内義隆自刃の地たる市内の大寧寺を訪ねたのちバスで萩市内に入る。萩市郷土史料館を見学ののち萩城跡を一巡し、厚狭毛利家屋敷長屋、萩史料館、明倫館跡、高杉晋作生誕地、木戸孝允旧宅跡、松陰神社、松下村塾、伊藤博文旧宅、萩藩御船倉、毛利氏菩提寺東光寺、長州藩反射炉などを次々に見学し、徒歩行程一二キロに及んだ。修学旅行季節のこととて萩市内には中学生高校生の団体が目立ち、史跡見学の西洋人の姿も数多く見受けられた。薄暮、市内の橋本川に面した旅館小林亭に投じ、夕食後研究発表会を行なって九時に及ぶ。

十二日、八時半宿舎出発、バスで一路山口に向う。市立歴史民俗資料館にゆき、山口市内の見学の指導をお願いしておいた館長内田伸氏に挨拶。同氏からまず館内の展示品の説明をしていただいたのち、同氏の御案内で旧山口藩庁跡を見学。ついで県立文書館に赴き、同館に勤務される広田暢久氏から同館書庫の中で文書史料の保存の実際について懇切な説明を受けた。そこからフランシスコ・ザビエル記念資料館に赴き、館長バラ氏から流暢な日本語で説明を受け、ザビエル来日四〇〇年記念事業の一つとして全世界のカトリック信徒の協力で建てられ昭和二十七年に完成した記念聖堂の内部を見学。内田氏の御好意で歴史民俗資料館で中食ののち、午後は瑠璃光寺五重塔、香山園洞春寺、大内氏館跡竜福寺などの大内氏関係の遺跡を見学し、内田氏の御専門の古建築学からいろいろの説明をしていただき、最後に常楽寺の雪舟庭を一周して見学し、内田氏にお別れし、市内の湯田温泉の西村屋旅館に入り、反省会を兼ねて晚餐を共

にした。

十三日は自由見学を行なうことにし朝食後まもなく解散。この日天候は下り坂となったが、十日から十二日までは好天に恵まれ、何の事故もなく、予定の全日程を消化し、充実した修学旅行を実施することが出来たのは幸であった。

(佐藤三郎)

北陸班

今回の北陸班研修旅行のねらいは、歴史時代を通じて軍事経済的に重要な意味をもつ琵琶湖を中心に、その南西側の各遺跡の実地検証を試みることに、その日本海沿岸地方の主要流通路としての若狭街道を通ってみることにあった。参加学生二十三名、指導教授は北村。また、中世史の権威である特別客員教授村田正志先生にも御参加をねがい、終始御懇篤な御指導をいただいた。

五月十日 正午米原集合、以後の全行程に契約した貸切バスにて、現存近世城郭中でもその気品と偉容を誇る井伊氏の彦根城跡に直行、短時間で庭園、天守閣、大手門を歩いて築城技法の要点を見学したのち、「近江風土記の丘資料館」で自由研修、同館で滋賀県教委の考古学者近藤滋氏と合流して、ただちに安土城跡にのぼった。同氏は安土城に関する第一級の専門家であり、この著名な中世城郭について現地で考古学的調査所見を伺い、本丸で四方を眺めながら安土城の歴史地理学的な多くの解説をきくことのできたことは貴重であった。

次いでバス中で近藤氏から更に指導をうけながら近時ようやく国指定史跡となった佐々木六角氏の観音寺城跡に向い、ここでは戦国期部将たちが常住した山頂部の壮大な館跡をみるができなかったが、南麓石寺地区の城下町発展の形跡を、現地を歩きながら詳細に説明していただき有益であった。次いでまた、王朝文学史にも名高い国指定史跡老蘇森で式内社奥石神社に参拝、更に途中古代の有名な蒲野里などを通過して半日の行程を終った。大津泊。

五日十一日 この日の朝早く県教委主任技師の林博通氏にきていただき、今

日一日の日程の案内をお願いする。まず近江国庁跡。この国庁跡は正殿、脇殿などの主要官衙跡が明らかになったことで昭和四十八年国指定史跡となり、尔後容易に検出しない諸国の国庁跡の考古学の調査のいわばスタンダード的存在となったものであるが、この調査を由来担当している考古学者の林氏からは、その主要官衙跡がめずらしく南方に位置している特徴や周辺遺跡、特に推定国分寺遺跡らしきものなどについての詳細な説明をきき、現地に即しての歴史考古学の一端を見聞した。

次いで、石山寺、三井寺などは位置を確かめるだけで素通りし、いよいよ本命の近時ようやく史跡指定となった近江大津宮錦織遺跡。大津宮跡には由来各説があり、その跡地は近年まで不明であったが、林氏は多年その探求に労を重ね、その主要官衙跡と考えてまず差支えない地下遺構を検出することに成功した。それだけに林氏の説明には情熱と迫力があつたと私には思われるのだが、林氏はまず西方丘陵台地の現在史跡整備中の皇子山古墳にのぼり、用意していただいた略図コピーをくばった上で、錦織地区ならびにその南北両地区を展望しつつ宮跡の論争史と氏等の発掘調査結果の所見を学問的に紹介したのち、こんどは現地に下りて地形の説明と検出遺構の紹介をされたが、筆者も感激したことは、現在発掘調査が完了したばかりの発掘現場に案内していただき、その検出遺構が官衙建物の中樞部を形成すると思われる四間×六間の四面廂の建物跡だったことである。林氏には『さざなみの都大津京』（京都、サンブライト出版）という著書もあるが、その著書刊行後に検出されたこの遺構は、この錦織遺跡を大津宮跡とする林氏の推定を更に一段と確定に近づける重要な成果であった。筆者はその感激を学生諸君につたえたが、その反応はもとより定かではない。

次いで、これも大津宮関連遺跡である南滋賀廃寺跡、その瓦窯跡であることが明らかな榎木原（はんのきはら）遺跡についても詳細な、かつ極めて興味の

深い説明を伺い、更に天智天皇建立といわれる金堂、講堂、塔跡の礎石跡を見せる山中の壮大な崇福寺跡を案内・説明していただき、以上によって「幻の都」大津京の最近歴史学上の概容は把握することができたのではないかと思われる次第である。

もっとも、この種の強行軍の勉強では学生諸君の疲労度も考慮にいれねばならず、また時間的制約もあって、本来立寄るべき日吉神社境内(国指定史跡)は素通りし、林氏とも別れて次は若狭街道を一路小浜に向った。現在はおとより舗装道路であるが、地形と道路の状況から明らかに今津から小浜に向う旧若狭路であり、近年の全国的に行なわれている「歴史の道(古道)調査の概況、その問題点等との視角からこの街道を観察し、最後に小浜で福井県立若狭歴史民俗資料館副館長森川昌和氏の案内で同館見学、そのユニークな展示法と特に製塩土器と製塩技術等に感銘をうけ、次いで近くの若狭国分寺を見学してこの日の日程を終った。小浜泊。

五月十二日 この日の日程は越前、つまり福井県の歴史に何等かの感触をえるため、まずは鯖江市の王山古墳群と中世城館跡として著名な福井市の一乗谷朝倉氏遺跡と金津町の吉崎御坊とを主たる見学地としていたが、時間の都合で鯖江市は割愛せざるをえなかった。

出発直後、近くの若狭彦、若狭姫両神社を参拝し、二時間余を要して福井市に入ったわけであるが、一乗谷では県立朝倉氏遺跡資料館を水野和雄氏の案内で見学し、次いで同氏による現地説明をうけた。筆者はこの遺跡が昭和四十六年に特別史跡になった直後から数回訪れているが、現地の状況と水野氏の懇切な説明で、従前よりはるかに研究と整備が積み重ねられ、特史の名に恥じない一級の遺跡となったことに深く感動した。この遺跡に関しては学生諸君も同感だったように思う。しかも、殆んど完成に近い武将の館の復原家屋を見ることができたことも幸いであった。また、水野氏の庭園遺構に関する適切な解説は、

中世武将の芸術思想の深淵に迫る糸口をも示してくれて誠に有益であった。

一乗谷からは県教委の仁科章氏の案内で曹洞宗本山の永平寺、有馬氏の丸岡城跡に立寄ったのち、時間の都合で高速道を一路吉崎御坊跡(昭和五十年国史跡指定)に向った。室町時代の北陸地方を語るとき、蓮如の布教の意味は大きく、今日なお未発掘で遺跡の正確な把握は十分ではないが、いずれにしても現地を一見したことは有益であった。仁科氏によれば、福井県の遺跡の特徴は古墳であるという。なるほどとも思われるが、今回の研修で古墳を見学する機会は殆んどなかったと言ってよい。芦原温泉泊。夜反省会をひらき、全日程終了。なお、全日程間、車中で学生の発表会をひらき、村田教授とともに各個指導に当った。十月十三日朝食後解散。終りに、今回も、天候にめぐまれ、ハードスケジュールについて今後は考えねばならないものの、学生諸君の努力によって目的をほぼ達成しえたであろうことをよろこびたい。

(北村文治)

東北班 五月十日(火)晴。学生の指導は、藤木邦彦、大川清岡教授と戸田有二講師があたった。研修旅行の集合場所は秋田駅。全員集合時間である午前八時にそろった。学生十四名、教員三名、総勢十七名である。全員貸切バスに乗り込み、八時十分、戸田講師より見学地の日程及び概要が説明され、最初の目的地秋田城跡に向けて出発。秋田城までの所要時間は約四〇分。その間車内で大川教授より秋田城跡及びその周辺に於ける古代の城柵についても意義と、その概要について説明があった。大川教授は、昭和三十四年度よりこの地域及び周辺の発掘調査に携わっており、秋田城跡の調査にも数次にわたって参加されていた。このため秋田城跡についてもくわしく、また周辺の地理にもあかるい。秋田城は現在の秋田市寺内高清水岡の低丘陵に位置する。古代出羽国北部の経営を目的として置かれた府城で、当初、最上川河口付近に置かれた出羽柵

を天平五年に雄物川河口（高清水の岡）に移したものがこの秋田城といわれている。九時頃秋田城到着、しかしバスは城柵中心までの通行は不可能であったため徒歩で登ることとした。途中東清水の湧き水・古四王神社等を見学し、その中心部と考えられる護国神社に向かった。秋田城跡の発掘調査は昭和三十四年度より国によって四ヶ年実施され、その後を受けて昭和四十三年度より市教委が調査を行ない、現在も継続中である。現地では、市教委小松正夫氏案内で資料館・政庁跡・外郭線の築地跡などを見学し、また懇切丁寧な説明も受けた。十一時過ぎ秋田城の見学を終了し、次の見学地である弘田柵に向かう。弘田柵は秋田県仙北村に位置するため秋田城跡からは南東約六〇キロの方向になる。所要時間約一時間三〇分、雄物川沿いに弘田柵へ向い途中昼食を済ませる。弘田柵は秋田城と並ぶ古代出羽国に於かれた城柵である。昭和五年上田三平氏等によって発掘調査が実施されて以来、現在も秋田県教委の手によって発掘調査が続けられている。真山・長森地区の自然丘陵を利用して設置された城柵である。古く昭和五年の発掘調査でこれらの丘陵を楕円形状に角材を板塀状に立ち並べた柵列が東西一三五〇メートル、南北七三〇メートルの範囲にわたって確認されている。この城柵については文献上に見られる出羽国に設置された城柵に該当する確証がないというところから現在までその地域の字名を取って「弘田柵」と名称されてきた。しかし、最近ではこういった城柵の調査、あるいは文献的研究など総合的な観点から弘田柵を古代の雄勝城跡としてとらえる研究者もいる。二時頃弘田に到着。真山・長森丘陵の隣接した水田の中に埋蔵文化財センターが設置されている。近代的な設備を備えた施設で、県内に於ける埋蔵文化財調査の約半数近くはこのセンターによって実施されている。弘田柵跡発掘調査研究所もこの中に置かれている。センターでは県教委の佐々木大晃氏・舟木義勝氏が応対され、館内の施設及び資料館を案内説明して下さった。そして弘田柵跡現地見学の前に四〇分程スライドによる現在までの発掘調査状況

等について舟木氏より説明を受ける。引き続き舟木氏の案内で現場を二時間程見学。この時運良く発掘調査も行なわれていたのでこのことについても説明を受けた。午後五時弘田柵跡の見学を終え、一日目の宿舎である角館町、我が家旅館に向う。弘田から角館まで約三〇分程で到着。夕暮れの武家屋敷及び町並みを見学して初日の予定を無事終了した。

五月十一日（水）晴。昨日は見学場所での徒歩の距離が長かったせいも十時過ぎには全員床に就いた様である。早朝、角館の町並みを散歩した学生もいたが、七時十分朝食をとり、七時五〇分、二日目最初の目的地岩手県盛岡市に向かう。通称秋田街道（国道四六号線）を北東に進み田沢湖畔の南岸で東に向かう。国鉄田沢湖線と平行に走り、途中田沢湖町・国見温泉・零石町を通過し盛岡に至るが、数年前までこの道は冬は雪のため通行できず、また雪のない時でも大曲・盛岡は車で半日を要したものである。しかし現在では道路も整備され雪積の多い場所はトンネルが完備されたため、その所要時間は約一時間三〇分と短縮された。我々も九時には東北自動車道、盛岡インターに到着。ここで二日目の見学に随行案内する本学国史学専攻卒業生、西野修氏とおち合う。彼は現在矢巾町教委で文化財を担当しており、今回見学予定の徳丹城跡発掘調査主任として調査を行なっている町職員である。西野君の案内でまず斯波城跡に到着。この遺跡は近年まで大田方八町遺跡といわれていたものであったが近年の発掘調査で文献上の古代紫波城ではないかと推定されている。現地の説明は盛岡市教委御手洗氏があたって下さった。斯波城の見学を終え岩手県立博物館に向かう。博物館は盛岡市郊外の低丘陵地帯に建設されており、極めて近代的な設備を備えているもので一般陳列室は広く歴史・自然・民俗とそれぞれ分離されている。三〇分程博物館の内部構造及び運営について学芸員の説明を受ける。昼食をここで取り次の見学地徳丹城跡に向かう。徳丹城は矢巾町にあり、古代蝦夷経営に於ける最北端の城柵で、一辺約三五〇メートルの柵列が方形に

全日程を消化し全員解散、各自自由行動とした。

(戸田有二)

めぐらされていることが確認されている。現在発掘調査も継続中で一部中心部は整備も行なわれている。現地での説明は西野修氏に行っていた。徳丹城の見学を終了して二日目最後の見学地胆沢城跡及び高野長英記念館に向かう。胆沢城跡では、水沢市教委、伊藤博幸氏(国史学専攻第一期)が現地での案内と説明を下された。この日は丁度西庁西側の発掘調査が実施されており、現場には五十七年度国史学専攻の卒業生土沼章一君が調査員としてそれにあたっていた。見学終了して高野長英記念館については午後四時頃であった。一時間半程で見学を終え二日目の宿舎である駒形旅館に入る。午後六時より一時間程、伊藤博幸氏によりスライドで胆沢城に於ける最近の状況を説明していただいた。この間宿舎には本学国史学専攻の卒業生、本沢京子(旧姓、有山―平泉町小学校教諭)・工藤武(一関市教委)・土沼章一(水沢市教委)の各氏がかけつけた。夕食は七時過ぎより始まり卒業生五人もこの中に加わる。それぞれの自己紹介から始まり、和やかな雰囲気であった。

五月十二日(木)晴。午前中は北上市立歴史民俗村の見学であった。北上市郊外で北上川のほとりの丘陵に設置された施設である。ここでは市教委本堂学芸員の説明を受けた。昼食は花巻市内で名物の「わんこそば」大会が催され、藤木教授を除き全員がこれに参加した。ちなみに学生の最高七五杯、大川教授四〇杯といったところであった。午後は水沢市郊外にある平安時代の創建と伝えられる正法寺・黒石寺を中心に見学する。この両寺院は四キロ程しか離れておらず、正法寺は現在禅宗の道場で、その萱葺きの本堂は極めて壮観なものであった。また黒石寺ではその本尊「貞観四年」の胎内銘をもつ薬師像の拝観が出来た。

五月十三日(金)雨・曇り、研修旅行最終日は平泉を中心に見学した。午前九時毛越寺で、この日案内説明して下さる町教委本沢主事とおち合い、雨の中毛越寺・観自在王院・無量光院の順で見学。中尊寺山門前で今回の研修旅行の